

令和6年の水稲における斑点米カメムシ類と斑点米の発生状況

水稲巡回調査圃場での斑点米カメムシ類(以下、カメムシ類)のすくい取り調査および普及センターの水稲定点調査圃場の調査米(以下、定点調査米)の斑点米等発生調査の結果をもとに、令和6年の水稲におけるカメムシ類と斑点米の発生状況についてまとめましたので、次作の参考にしてください。

〔調査方法および結果の概要〕

1. カメムシ類の発生状況調査(すくい取り調査)

巡回調査圃場57地点について、7～8月に調査した結果、虫数、発生地点率ともに平年を上回る値で推移した。発生地点率が最も高かった8月下旬ではイネカメムシが最も多く、虫数は平年よりやや多い～多く、発生地点率は平年よりやや高かった。クモヘリカメムシは虫数、発生地点率ともに平年並であった。8月上旬・下旬の調査においてイネカメムシの発生が多かった地域は県央、県南および県西地域であったが、本種は県内全域で発生していた。

(令和6年9月30日発表 病虫害発生予報10月号p9-10防除所レポート参照)

2. 斑点米等の発生状況調査

定点調査米37点について、斑点米等の発生粒数を被害部位・種類別に調査した結果、精玄米1,000粒当たりの斑点米等の発生粒数は鹿行が4.1粒と最も多く、県西3.5粒、県央1.9粒、県北および県南1.1粒、全県平均2.4粒であった。被害部位別では基部が56%と最も多く、次いで側部26%、頂部14%であった。地域別にみると、県北では側部と頂部(各41%、36%)、県央、鹿行および県西では基部(各74%、40%、68%)、県南では基部と側部(各48%、45%)が多かった(表1)。本年産の斑点米等発生粒数は過去11年中2位で、平年より多かった(図1)。

表1 普及センター水稲定点調査圃場における斑点米等発生状況

地域〔圃場数〕	被害部位・種類における発生粒数(粒/精玄米1,000粒) ¹⁾					合計
	側部 ²⁾	基部	頂部	カメムシ黒点米 ³⁾		
県北〔4〕	0.5 (41%) ⁴⁾	0.2 (18%)	0.4 (36%)	0.1 (5%)	1.1	
県央〔6〕	0.3 (16%)	1.4 (74%)	0.2 (9%)	0.0 (2%)	1.9	
鹿行〔6〕	1.3 (31%)	1.6 (40%)	1.1 (26%)	0.2 (4%)	4.1	
県南〔10〕	0.5 (45%)	0.5 (48%)	0.1 (5%)	0.0 (2%)	1.1	
県西〔11〕	0.7 (19%)	2.4 (68%)	0.3 (9%)	0.1 (4%)	3.5	
全県〔37〕	0.6 (26%)	1.4 (56%)	0.4 (14%)	0.1 (4%)	2.4	



基部被害

1) 数値は四捨五入しており、部位・種類別の計と合計が一致しないことがある

2) 背部、腹部を含む

3) 頂部被害とくさび状の裂開がみられるもの

4) 括弧内の数値は部位・種類別の割合を示す

〔考察〕

カメムシ類が米を加害する部位は、クモヘリカメムシが側部、イネカメムシが基部、アカスジカスミカメは頂部であることが多いとされている。これに基づいてカメムシ類の加害種を地域別に推測すると、県北ではクモヘリカメムシとアカスジカスミカメ、県央、鹿行および県西ではイネカメムシ、県南ではイネカメムシとクモヘリカメムシが優占していると考えられた。

県全体ではイネカメムシの加害が最も多かったと考えられ、これまでほとんど発生が確認されなかった県北にも分布が拡大していることから、県内全域で注意が必要である。

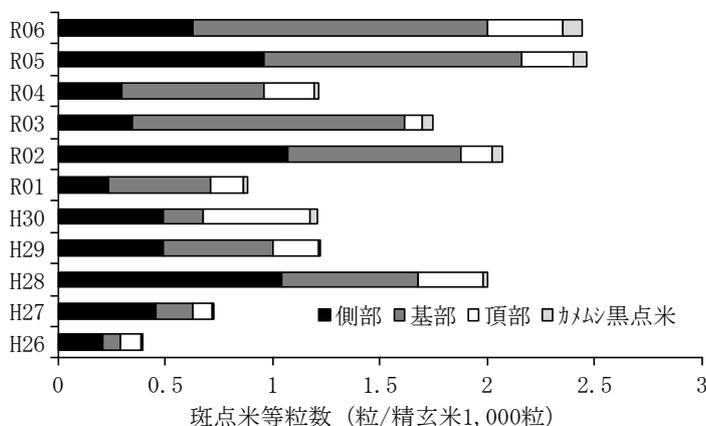


図1 普及センター水稲定点調査圃場における斑点米等発生状況の年次推移